

## エンドユーザー向き 記述方式を備えた 病歴管理システムと MAPS-E

医師は、患者の診療に関して得られた情報をすべてカルテに記入し、後で必要に応じてそれらの内容を参照するが、これを参照しやすい形で保管することを病歴管理という。

病歴管理システムは、これらの診療情報、すなわち患者の症状や検査データなどをコンピュータに管理させ、必要な時に必要なデータを見やすい形で提供するものであり、医師の診療や臨床研究に役立つものとして大いに期待されている。

特に医療従事者が直接ディスプレイによりコンピュータと会話しながら、診療情報の取得や利用を行なう会話型システムは、今後の発展が望まれている。

この会話型システムを開発する場合、診療情報の種類や入力する順序は診療科、医師によって全く異なり、これらを統一し、標準化することは難しい。そのため、診療科、医師別にそれぞれ異なる入力用画面を設計しプログラムを開発することは、多大の努力と費用が必要となる。更に、診療情報の種類や入力する順序が固定されており、変更が困難という問題もある。

このように、診療情報の入力には、診療情報項目や会話手順を自由に変更できる柔軟性と、入力の手間がかからない操作性の良さとが要求される。

これらの要望に対して開発されたMAPS-E (Medical logic Auto-Programming System for Extended use) は、汎用データベース管理システムADM (Adaptable Data Manager) にサポートされ、特に柔軟性に富んだ操作性の良い入力手段を提供する、ライトペン付きディスプレイ端末を使った会話型システムである。



まず柔軟性に対してMAPS-Eは、医療従事者の好みの会話プログラムを容易に開発でき、更に情報項目などをオンライン会話型で修正できるように、専用の記述方式と修正機能をもっている。医療従事者が、MAPS-Eを使って病歴情報をデータベースに登録する場合には、まず専用の記述方式によって自分の好みの会話手順、ディスプレイ画面フォーマットなどをコーディングする。このコーディング内容を、MAPS-Eに入力すると、ディスプレイ端末からライトペンとキーボードで、病歴情報を入力することが可能となる。実際に使用している間に、会話手順や

項目の変更が必要となった場合には、会話ソフトウェアRE-MAP (REvising tool for MAPS) を使い、オンラインで修正できる。

次に、操作性に対しては、MAPS-Eは項目自動選択機能をもっている。これは、MAPS-Eが入力済みデータを利用して、次に入力される可能性の大きい項目を、既登録の論理によって自動的に選択するものである。この論理も専用の記述方式によって、医療従事者が記述することができる。

病歴管理システムは、病院のトータルな情報管理を目指して開発されており、今後の発展が期待されている。

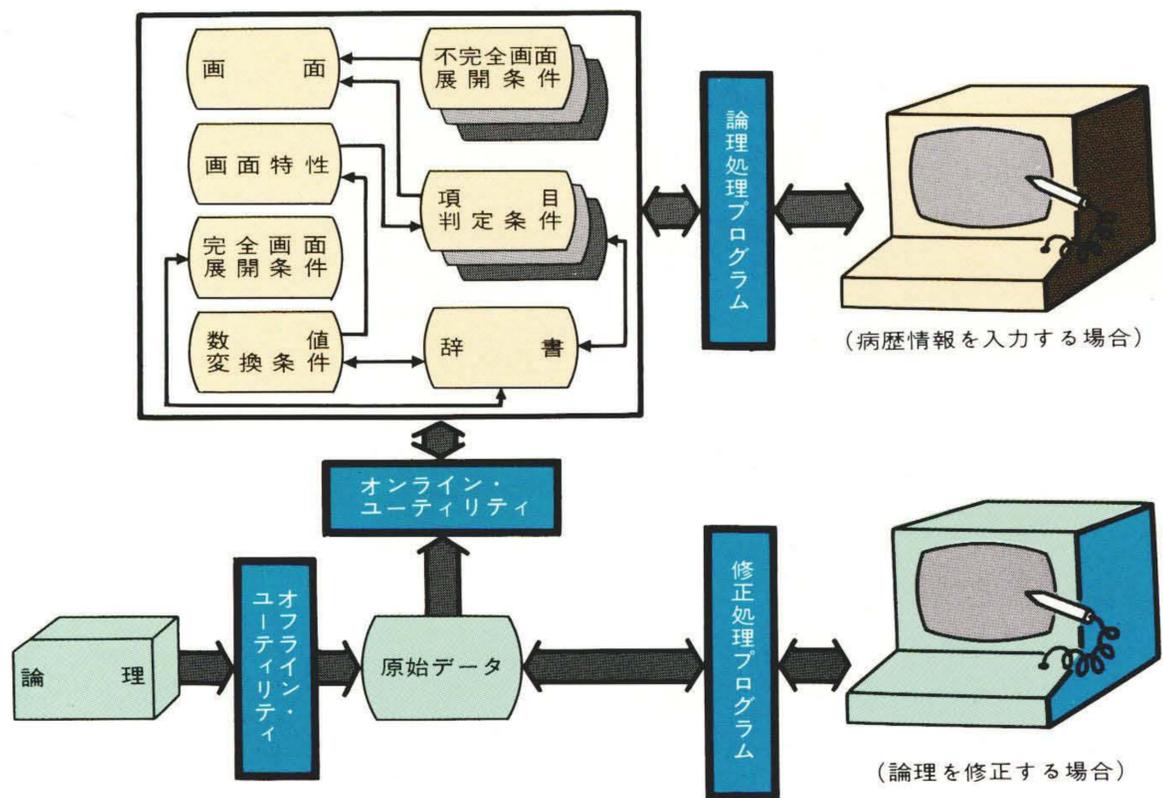


図1 ソフトウェア構成